

「顎関節症の新時代 ―世界のエビデンスに学ぶ歯科医療チームの役割―」

日本歯科大学附属病院総合診療科准教授

口腔顔面痛センター / 顎関節症診療センター・センター長

一般社団法人日本オロフェイシャルリリース協会理事

原 節宏 (はら せつひろ)

多因子疾患といわれて久しい顎関節症は、治療方法も多因子に対応して数多く開発されています。しかし、実際に選択している初期治療といえば、スプリントで様子を見ながら、生活習慣の改善指導と開口訓練、ケースによっては咀嚼筋マッサージなどを歯科衛生士さんとチームで取り組んでいるという歯科医院が多いのではないのでしょうか。

比較的、軽症の患者さんにはこれらの対応で成果が上がっているかもしれません。しかし、統計的には、顎関節症患者の大多数は思うように治らず、転医と転科を繰り返し、歯科領域にとどまらず医科領域においても社会的問題となっている現状があります。

2000 年を越えるころから、医療の世界は EBM : evidence based medicine を標準として、患者さんが安全かつ最善の治療とケアを選択できることを目的とした臨床診療ガイドライン (CPG : clinical practice guideline) が多くの医療分野で作成され、顎関節症においても、過去に信じられていた定説が見直されたガイドラインが公表されています。

2020 年に米国国立衛生研究所 (NIH) から顎関節症治療に対する 3 回目の警鐘ととれる文書が発布され、それを受けて 2023 年にはインパクトファクターが世界第 4 位の医学総合誌 The BMJ に世界で評価が高い治療と指導は何なのかを明記した顎関節症治療のガイドラインが公表されました。これらの治療とケアを活用するには、これまで以上に歯科衛生士の力を活用しなければ実現できないものとなっています。講演では世界の潮流を理解し、当附属病院でも二十数年前から採用している、世界的評価の高い治療方法を供覧しながら、顎関節症に対する歯科衛生士とのチーム医療を、歯科医院でどのように展開するべきかを提案します。